King Henry 8 of England and Ireland (1491-1547)TOPHAM / ORION PRESS

スタイリッシュ・カリズマ

第一回

ヘンリー八世とプレ・バロック

中野香織=文

by Nakano Kaori

チェスターフィールド・コート。ノーフォーク・ジャケット。ラグラン・スリーブ。スペンサー・ジャケット。etc.
人の名前がついたファッション用語は、メンズ・ファッションの世界に頻出する。しかし、チェスターフィールド伯爵も、ノーフォーク公爵も、ラグラン男爵も、スペンサー伯爵も、ファッション・デザイナーではない。個性的なスタイルゆえにファッションの源流になってしまったり、突飛な思いつきやアクシデントから斬新なアイテムを生んでしまったりして、はからずも男のファッション史に名を残すことになってしまった男たち。メンズ・ファッションを導いてきた神話的人物は、ファッション業界に関わる仕掛け人とは無縁の男であることが多い。むしろ、生き方や行動と連動したスタイルを確立し、中身と見た目の相乗効果で周囲に強い影響力を波及させる力をもった、カリズマ的な男たちこそがファッション史に名を連ねてきた。
そんなスタイリッシュ・カリズマたちをめぐる話をしていきたい。彼らの人物像や、同時代人を魅了したスタイルを具体的に見て、そこから連想される美的コンセプトについて考えたり、身体イメージが陰に陽に及ぼす力に思いを馳せたりしたいと思う。
第一回の今月は、十六世紀のヨーロッパ史にとどまらず、メンズ・ファッション史においても欠くことのできない王様のなかの王様、英国王ヘンリー八世(1491～1547)をめぐるお話。

ヘンリー八世（一四九一～一五四七年）。おそらく歴代のイギリス王のなかで、もっとも愛され、恐れられ、あれこれと語り継がれている王様かもしれない。

この王様、政治史的な観点からみると、英国国教会を創設し、絶対王政の基礎を築いた君主ということになっている。しかし、イギリスの観光みやげ売り場で「ヘンリー八世と六人の妻チョコ」が人気商品になることからも察せられるように、彼はなんといっても「男子継承者を得るため」を大義名分に妻を六人取り替えた男として有名なのである。そもそも、国王を首長とする英国国教会という政治的成果をもたらす原因になったのは、彼の離婚問題であった。

現在でもイギリスの国教である英国国教会は、ヘンリー八世が二十年近く連れ添った最初の妻キャサリン・オブ・アラゴンとの結婚を無効にしてアン・ブリンと結婚するために、離婚を認めないカトリックのローマ法皇とケンカして、イギリス独自の教会を強引に作ってしまった結果なのである。

しかしヘンリーは、ここまでだだをこねて手に入れたアンにもすぐに飽きて、ジェーン・シーモアに心がうつり、用済みになったアンをでっちあげの不貞罪で首切り台に送っている。（このあたりの事情は、チャールズ・ジャロット監督の『一〇〇〇日のアン』［一九六九年］がドラマティックに描いている。）ジェーンが出産後亡くなったあとにはさらに三人、妃をとりかえ、その一人キャサリン・パーの首もはねている。さらに臣下や聖職者も次々と処刑し（『ユートピア』の著者トマス・モアも離婚問題に口を閉ざし続けて反逆罪で死罪に。フレッド・ジンネマン監督『わが命つきるとも』［一九六六年］はそのいきさつを描いた秀作）、冷酷な専制君主として恐れられた。

しかしその一方、学識豊かで、身長一九〇センチあまりという並外れた体格、ヴェネチア使節に「今まで見たなかで最もりりしい君主」と評されたほどの美丈夫ぶりで周囲を魅了。「ヘンリー沈めば皆沈み、ヘンリーが笑えば皆笑う」というような豪放な魅力で、わがままもやんちゃ坊主の欠点として愛されてしまうようなところがあった。

十六世紀イギリスのメンズ・ファッション

ヘンリー王は、史上最高の洒落者と呼ばれたフランスのフランソワ一世に準えられて、「イギリスのフランソワ一世」とあだ名されるほどおしゃれ好きでもあったのだが、右上のホルバイン派による彼の肖像画をご覧ください。

王様の肖像画にふさわしいドレスアップをしているのは当然であるが、基本となる衣装システムは、当時のメンズ・ファッションからさほど逸脱していない。まずはアイテム解剖から始めてみよう。

頭部には宝石がぎっしりと縫いこまれた帽子。縁どりのオストリッチの白い羽は、光輪のイメージを作っている。

ボディは四種類の衣類の重ね着から成る。肌の上にはリネンのシャツ（カラーとカフスにフリルあり）、その上に無数にスラッシュの入ったダブレット（詰め物入り上着）を着ている。スラッシュから下のシャツをつまみ出してリボン装飾風にするのは、十六世紀にヨーロッパ広域にわたって大流行したファッションであった。まだダーツ縫いなどの技術もない時代で、スラッシュがフィット感を調整する効果もあったらしい。各スラッシュをつなぐ部分にもリズミカルに宝石が縫いこまれている。

そしてこのダブレットの上には、ジャーキンと呼ばれる長いベスト風の衣服がまとわれ、ウエストの上にU字型の開きを作ってサッシュで留められている。ウエストから下には、このジャーキンのすそ部分がスカート状に垂れている。そのすそをかき分けるようにして中央部から突出しているのはコッドピース。日本語で「股袋」というものすごい訳語がつけられているのは、中身としてキャンディやお金が詰められていたことによる。

この基本ウエアの上に、肩～袖上部にたっぷり詰め物が入ったショート・ガウンを羽織って、ボディ部分は完成。

脚部に視線を移そう。

ホウズ（水をまくホースと同じ綴り）と呼ばれるストッキングで脚全体が覆われ、左膝にはガーター勲章が飾られている。四角い胴部のシルエットと呼応するようなスクエア・トウの靴にもスラッシュが施されているのがわかる。十四世紀以来、男性の魅力のポイントは脚線にあった。適度に筋肉のふくらみをもった美しい脚線を作るために、ストッキングに詰め物をする男も多かったらしい。

ヘンリー・スタイルの特徴

では、この衣装システムにおいて、ヘンリー八世スタイルの見せどころとは？

その1　ボンバストによる力の誇示

上半身のどっしりとした量感は、ダブレットにたっぷりと詰め物をすることから生まれる。馬の毛や綿などをぎっしりと詰めて、このように膨張させることを「ボンバスト」と言う。渋谷109セクシー系のウソ胸作りで一世を風靡した「ボンバスト」というブラジャーと、語源も発想も同じである。

その2　脚線とコッドピースによる男性性の誇示

ダンスで鍛えた美脚を輸入もののシルクのホウズで覆い、さらに英国の最高勲章であるガーター勲章で飾って脚の美しさを強調するのがヘンリー流。前出の

The Genealogy of the Stylish Charisma

「たが命つきるとき」にも、彼が誇示をする場面がでてくる。

当時ヨーロッパ一の強国だったスペインの男たちのコッドピースが天に向かってそそり立っていることから推し測ると、征服者の自信、男としての自信はコッドピースの派手さに比例した模様である。

その3　ラグジュリー感の演出

高価な素材や宝石を駆使しての贅沢感の演出。これは富の誇示という効果をもたらすほかに、実は欲望の大きさをも暗示する。この時代において、luxuryという言葉が意味するものは、ずばりlust（好色）だったのである。

……と列挙してみると、この王様は陰翳の美学や抑制のダンディズムなど知ったことかとばかり、より大きく、よりラグジュリアスに、よりセクシーに、すなわち欲望全面解放的に装うことに喜びを感じていた模様である。これが許されるのは彼が絶対権力をもつ王様という地位にあるから、ということもたしかにあっただろう。しかし、同じことをやっても反発をかってしまう王様だっている。ヘンリーの場合、まんまキャラクターを反映した一見能天気にみえるスタイルが、国民の心理を政治的に自分に有利な方向へ向ける効果をもたらしたのではと憶測するのである。

すなわち、天然の「大きくてラグジュリアス」ぶりを何の遠慮もなく、堂々と強調した威容は、実は根拠にやましさのある絶対権力（なんといっても新しい女と結婚したいとだだをこねる形で英国国教会を作ってしまった）に対する疑いを、なんとなく封じこめてしまう。天性のカリスマ性をいっそう誇張する身体イメージは、二流国から一流半国あたりへ成長しようとしていた当時のイギリス国民に不可思議な信頼感を与える役割を果たしたのではあるまいか。さらに、男性性のおそれさえ誇示は、この男ならば新しい女を次々追いかけたがるのも仕方ないかもしれない、というあきらめにも似た妙な許容の感情を引き起こす。八〇年代の後半にヴェルサーチのスーツを着ていた男の誠実が、はなから諦められていた例が多かったことを思い出す。

エリザベス一世時代のファッション

さて、ヘンリーの二番目の妻となったものの処刑されたアン・ブリンが生んだ娘は、女王エリザベス一世となり、生涯独身を貫いてイギリスの第一次黄金期に「ヴァージン・クイーン」として君臨することになる。この世代になると、男性のシルエットは著しく変化する。今年のアカデミー賞七部門受賞映画『恋におちたシェイクスピア』でもこの時代の衣装の数々がゴージャスに再現されているが、エリザベス一世の愛人と目されていた男で、宮廷のテイストの支配者としても君臨した、レスター伯ロバート・ダドリーの肖像画を見ながら、変化したアイテムをチェックしてみよう。

その1　ラフ

生首をいただく装飾皿にも見える首回りの装飾。幾重にも畳んで固く糊付けしたひだ襟は、男女を問わずマストアイテムとなった。派手化、巨大化に拍車がかかり、多種多様なバリエーションを生んでいる。贅沢禁止法によって、ステイタスによるラフの幅の規制がうるさくおこなわれねばならなかったほど、激しいモード戦争の焦点となったアイテムである。

その2　ピーズコット・ベリー

ヘンリー時代に比べればずいぶんタイトなシルエットにはなっているが、ダブレットのおへそ周辺には巧妙な詰め物がなされている。ピーズコット（エンドウ豆のさや）型のおなか（ベリー）になるように詰め物をし、V字型ウエストをマークするガードル（ベルト）のうえにやや垂れるような形で成型するのである。そうやって強調されたV字の先端にはコッドピースの先端が重なり、セクシーな効果を強調するギミックの一つとなる。ダドリーのダブレットにも無数のスラッシングとピンキング（穴あけ）で装飾が施されていることに注目。

その3　トランク・ホウズ

ホウズの上部がふくらんで、半ズボンないしブルマ状になったもの。ここにはたっぷり詰め物がなされた。ダブレットのウエストは絞り込み、トランク・ホーズは思いきり膨らます。ヘンリー八世時代の廷臣たちが、王にならって「四角く、雄々しく」のシルエットを作ったのに対し、エリザベス一世時代の廷臣たちは、言ってみればフェミニンな感じのするシルエットを作りこんでいる。

……というように、ディティールやシルエットは変化しているが、実は「ダブレット&ホウズ」という男の服の基本システムは変わっていない。このシステムが変るのは、十七世紀後半、スーツの祖先が誕生する時である。

レスター伯ロバート・ダドリー（1533～1588）

Robert Dudley, Earl of Leicester (oil on oak panel) by MEUREN, Steven van der (fl 1543-68) Wallace Collection, London, UK/ Bridgeman Art Library, London/ New York

エリザベス一世（1533～1603）。ファージンゲール（鯨骨下着）で広げたスカートと巨大ラフが極的にリフレイン

Queen Elizabeth I of England and Ireland (1533-1603) by English School (oil on panel) Palazzo Pitti, Florence/ Bridgeman Art Library, London/ New York

プレ・バロック

さて、十六世紀は芸術史のカテゴリーでは「ルネサンス時代」である。「ルネサンス」を、中世の神様至上主義への反動としての現世的欲求を求める人間中心の精神運動と捉えれば、カトリック教会とケンカしてまでも自己の欲望を貫いたヘンリー八世は、まさしくルネサンス・マンであるとこじつけることができる。

しかし、彼や後世のダドリーの身体から受けるイメージは、ルネサンス美術や建築に特徴的な、均衡のとれた規範的な美のイメージとはほど遠い。

胴体やお尻部分に詰め物をしてまでもの不自然な誇張、巨大化に拍車がかかっていったコッドピースやラフ、過剰なほどのスラッシングやピンキング加工……。こんなファション表現は、ディドロが十八世紀に『百科辞典』で用いた次のバロックの定義にむしろ近い。「バロックは、奇妙な、風変わりな、といったニュアンスを帯びている。それは洗練といってもよいし、濫用といってもよいし、大げさな言い回しといってもよい。バロックの概念には行き過ぎたばかばかしさがつきまとうのである」。

バロック全盛期はこれより後の十七、十八世紀であるが、ことメンズ・ファッションに関する限り、「濫用」「大げさな言い回し」「行き過ぎたばかばかしさ」が炸裂しているのは、むしろこの十六世紀である。これほど誇張表現が喜々としておこなわれた時代は他にもないのではないか。

「バロック」は今ではすっかり美のコンセプトのひとつとして定着し、二十世紀末のデザイナーでは、たとえばジョン・ガリアーノの作る服がしばしば「バロック」的と称えられたりしている。ガリアーノ・ファッションが爛熟したバロック精神の花とするならば、十六世紀メンズ・ファッションは、いまだ名前を与えられていないバロック精神の生まれかけの萌芽といえるかもしれない。ガリアーノのバロックは、自然の誇張表現に毒々しさのあるひとひねりを加え、それこそ歪んだ真珠の華麗な退廃美のイメージを感じさせるが、ヘンリー八世の予兆的バロックには、変形や誇張にまだまっすぐな若い微笑ましさがある。

実は、十六世紀ファッションをバロックの先駆けと位置付けたくなったのは、ダンスで鍛えたのがご自慢というヘンリーの脚の存在感ゆえなのだ。つまり、『ヴェルサイユの詩学』（一九八一年）を書いたフィリップ・ボーサンは、バロック人間の特徴をこんなふうに表現しているのである。「自然が歩くことであれば、バロック人間は踊り、自然が語ることであれば、バロック人間は雄弁になる。」

宮廷ダンスはこれ以前からも紳士のたしなみだったとはいえ、踊る脚をこれほど印象的にした男はなかなかいない。

よく踊るだけでなく雄弁でもあったヘンリーには、六人の妻をもつという類まれな経験に裏打ちされた女性観なり夫婦観なりを聞いてみたい気がする。ちなみにアレグサンダー・コルダ監督は、『ヘンリー八世の私生活』（一九三三年）のなかで、チャールズ・ロートン演じるヘンリーにこうつぶやかせている。「六人の妻のなかで、いちばん良かったのは、悪妻じゃ」。